

地図からみえる先人の努力

静岡県 浜松市立広沢小学校 袴田 暁広

1 はじめに

4年生では、「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」について学ぶ。本単元において浜松市では、天竜川の治水や農地の開拓、産業の振興にかかわった先人の業績を取り上げるのが通例である。政令指定都市として発展する浜松の礎がどのように築かれたかを正しく理解し、郷土に対する愛情を育てるうえで、重要な単元である。

この単元は、昔と今との違いについて、児童に意識させることから学習が始まる。そこで、単元の導入時に3年生から使っている地図を活用することを考えた。地図上で確認することのできる土地利用のようすについて理解し、昔と今とを比較しながら歴史認識を深めるような展開をしていきたい。

2 わたしたちの郷土 工業都市・浜松

子どもたちに、「浜松で有名なものは何？」と問いかけると、「うなぎ」「みかん」などの答えが返ってくる。もちろん間違いではないが、実際には浜松市は工業都市としての色合いが強く、光関連産業や、自動車産業などがさかんな都市なのである。だが、この事実を子どもたちは意外に知らない。本単元では、具体的な先人としてホンダの創業者である本田宗一郎を取りあげたが、子どもたちのこのような認識を改善していく必要を感じた。

そこで、地図をもとに、土地利用のようすを調べることにする。ここで使う地図は、浜

松市の子どもたちが3年生のころから利用している『わたしたちのまち浜松市*』（以下、地図）である。

まず、地図の見方について復習する。方位や縮尺などの活用は、意外に定着度が低く、たびたび反復学習をすることの意義は大きい。とりわけ、凡例をもとにした地図記号の読み取りは、本実践とのかかわりが大きいため、ていねいに扱う。

次に、11万分の1の市全域図から、土地利用の実態を読み取る。15万km²以上の面積がある広大な浜松市だが、①北部の森林地帯、②中南部の畑作地帯、③南部の住宅地帯、というおおまかな区分があることに気づく。また、南部の住宅地帯には、学校のほかには工場の地図記号が多いことに気づく。ここで5万分の1の市南部の図を用いることで、工場の多さについて実感させていく。具体的な活動として、工場の地図記号を探し、一つ一つ赤枠で囲んでいくようにさせた。すると、あっという間に20か所以上の赤枠が地図上にあるとられ、子どもたちの中から、おどろきの声が上がった。わたしたちの郷土は、工業都市だったのである。



工場の地図記号「浜松市南部のようす（部分）」原寸

3 わたしたちの郷土 国際都市・浜松

上記の活動により、工場が多いという事実

を確認することができた。ここで、工場の立地条件についても考えさせた。

「工場はどんな所にあるでしょう？」という問いかけをし、小集団ごとに話し合う時間を設けた。本来は5年生で扱う内容であるが、地図を資料として活用することで、4年生でも十分に立地条件を見つけることができた。すなわち、「広く平らな土地」と「交通インフラ」である。本時においては、とくにこの交通インフラについて意識させた。

静岡県は、東海道本線や東名高速道路などが東西に走り、この恩恵を受けて各種の産業が発展している。浜松市においても、これらの幹線交通と、それをつなぐ主要地方道を活用した土地利用がなされている。「大きな道路や鉄道の上に工場がたくさんある。」こんな子どもの発言が、すぐにあちこちで聞かれた。



幹線交通「浜松市南部のようす（部分）」縮小

ここで、さらにもう一步、学びを深めたい。「なぜ、道路や鉄道の上に工場をつくるのでしょうか？」この問いかけに対しても、小集団の話し合いの場を設けたが、やはり、答えはすぐに見つけられた。「原材料を運び込み

やすいから。」「できあがったものを出荷しやすいから。」という発言を正答として共通理解した。あとで、「原材料はどこから運ばれてきて、完成品はどこに運ばれていくのでしょうか？」と重ねて問いかけた。「原材料は外国から来るんじゃないのかな。」「自動車は港から船に乗せられて行くんだよ。」などの反応があったが、この答えは当然工場によって異なり、一つにしぼれるものではない。しかし、地図上を左右に走る幹線交通のその先にある大都市圏や、商業港・空港などの存在に思いをはせるには十分である。また、3年生で見学した工場で、各種の材料が世界中から集められ、最終的にトラックに乗せられて工場に集められることを想起できる子もいた。わたしたちの郷土は、世界と結びつきながら発展しているのである。

4 おわりに

本時においては、この後、終戦直後の焼け野原のようすを提示する。現在との格差を実感させることで、貧しかった過去と豊かな現在とをつなぐ存在について意識させていくことになる。本單元においては、それが本田宗一郎から始まるオートバイ産業ということになる。もちろん取り上げる先人を山葉寅楠(ヤマハの創業者)や鈴木道雄(スズキの創業者)とすることもできる。今回は工場の地図記号を探したが、これを農地や住宅地とすることで、同単元の多分野の先人の業績と結びつけて考えることもできるだろう。

地図を通して現在の浜松市のようすを知る学習は、歴史認識を深める活動と結びつけることもできるという結論を得た。今後も他学年・他単元での活用を行い、可能性を探っていきたい。

* 「わたしたちのまち浜松市」 編集 浜松市教育研究会小学校社会科研究部 製作・発行 株式会社 帝国書院